

巽豊彦(著)、巽孝之(編)

『人生の住処』

東京：彩流社、2016年、2,500円＋税、256頁

足立 万寿子

本書は、上智大学名誉教授巽豊彦先生のご子息孝之氏のご尊父の膨大な業績を、単行本に掲載されたものを除いて、英文学研究、宗教的思索、避暑地随想、家族評伝の四部に分類し、編集された遺稿集である。部立ては「序章 英文学への招待」、「第一部 イギリス小説の紳士像」、「第二部 上智大学とカトリシズム」、「第三部 終の避暑地で」、「第四部 ある伝記の試み—父・巽孝之丞」から成っている。この構成は先生の生涯の公的側面（英文学者、J・H・ニューマン研究家、教育者としての各活動、カトリック教会でのジャーナリズム活動等）と私的側面（避暑地の長野県富士見町での出来事、先生のご尊父の伝記草稿等）を先生自身の文章で伝えるものになっている。

この書評では、評者に関心のある項目に特化し、英文学一般に関する「序章」と、英国19世紀小説に関する「第一部」の中の「第一章」と「第四章」を紹介、評させていただく。

「序章 英文学への招待 第一章 英国と英語と英文学」

巽先生は上智大学文学部英文学科新入生に向けて次のように語られる：

「英文学研究には英国と英語と英文学の三者を学ぶ必要があり、密接にからみあう三者の伝統に流れているものを捉えてはじめて文学作品へ正当な評価ができる。」

この言葉に接した一年生の多くは、英語だけでも攻落難解であるのに、三者のからみあう伝統、つまり歴史まで勉強しないと卒論が書けないのか—と途方に暮れることだろう。先生はそれを当然予想しておられ、次のように英文学研究の道程を登山に喩えて、励まされる：

「簡単に登れる山もあるが、登りにくい山ほど山の頂に立つ心地には比類がないし、人間がひとまわり大きくなったように感じる。英語を読むだけでも容易でないのに、高度な芸術の様式によって表現されているとなるとその解

明は苦業だが、そういう作品に挑戦し、高峰の踏破の喜びを得、ひとまわり成長できたと感じられる四年間にしてほしい。私もお手伝いしたいと思っている。」

一年生は先生のこの言葉、中でも最後のひと言で「山の頂を目指そう」と勇気が湧いてくることだろう。

先生自身が英文学者として常に「密接にからみあう三者」を念頭において研究されておられたからこそできたアドバイスだと評者はいま思い返す。さらに先生の助言の最後のひと言の「私もお手伝いしたい」は、先生が心底からの教育者でおられたからこそこの言葉だろう。ギャスケル研究に取り組んで四半世紀の評者は「先生のご心情をどれほど汲んでいたか」と、先生のお教えを受けた一人として反省の念しきりである。

「序章 第二章 偶然の世界」

先生はテーヌの発言や坪内逍遙の所論を引用されながら、「一国の文学史の発生と成長は民族・環境・時代・作家個人の四要因の相互作用によると考えるのは順当だ」とされる。しかし、先生はスペイン無敵艦隊の暴風による壊滅、元寇時の台風襲来、エリザベスI世の王位継承などの世界史上の偶発的事件に言及され、「文学史上でも、偶然も考慮すべきだ」と目配りへの必要性を喚起される。その根拠として先生は英文学史上OE時代の代表的古典とされている『ペーオウルフ』を例に挙げ、次のように問いかけ、断言される：

「同種類の作品がたくさん書かれ、批評家によってフルイにかけられ、残るべきものが残って、それが古典として伝えられる。だが、『ペーオウルフ』は本当にイギリス文学の古典なのだろうか。これはいくつかの作品の中でたまたま残り、他の作品は姿を消してしまった。これは古典ではなく、当時の文学を知る一例に過ぎない。」

さらに先生は、時代は下って近代の事例も挙げ、次のように「偶然の世界」へ目を向ける必要性を説かれる：

「G・M・ホプキンズやエミリー・ディキンソンの詩が後世に残ったのは詩人本人の意志ではなく、周囲の関係者の配慮があったためだ。これも偶然といえよう。偶然にして残らなかったものが多々あるに違いない。文学史としては伝えられたものだけが問題となるが、それら全体を支えている偶然の世界を背後に感じることも必要ではないか。そこにわれわれは常に何ものかを

負っているのだから。」

先生の言われる「偶然の世界」が意味することは、無関係に見えるようなことが回りまわって、見逃してはならない大切なことである場合がある、ということだろう。「偶然の世界を背後に感じる」必要性を評者なりにさらに言い換えると、自分の専門領域からは遠く離れていることも知る必要性、つまり広い知識や教養を身につける必要性にもつながるといことだろうか。

先生のこの言葉は、表層では文学研究者に対して「偶然の世界」にも視野を広げよ、との忠告だが、深層では世の中で偉人だとして崇め奉られ、独りよがりになっている者に対して、背後にいる無数の凡人に何ものかを負っていることを心せよ、との警告も含まれていると評者は見る。

「序章 第一章」で説かれた英文学研究に必要な「英国、英語、英文学」と「序章 第二章」で説かれた「偶然の世界」を合わせて、評者は英文学研究に必要な「四本柱」と解らせていただく。

「第一部 イギリス小説の紳士像 第一章 オースティンにおける紳士像、第四章 ディケンズにおける紳士像——*Great Expectations*——の場合」

この「第一部」の第一、二、四の各章で、時代とともに変化していく英国の紳士概念が19世紀英国小説のフィクションの世界でどのように具現化されているか、が明らかにされている。

「紳士 (gentleman)」という言葉、またその社会的階層である「紳士階級 (gentry)」という言葉は分かっているようで、明確な説明を求められたら多くの人は窮してしまうだろう。

本論に入る前の「第一部 第一章 オースティンにおける紳士像」中の「序」と「I. 紳士概念」で、英国の紳士ないし紳士階級とはどのような存在であり、それが時代とともにどのように変化していったかが、まるで歴史の授業のように的確かつ分かりやすく説明されている。その中で「第一章 II. オースティンが描いたジェントリ」と「第四章 ディケンズにおける紳士像」に関係する事柄を評者なりに要約すると次のようになる：

〈紳士階級は家柄・身分の点では貴族階級 (nobility) と自作農階級 (yeomanry) との中間に位置する階層で、年に約1千～1万ポンドの収入を生み出す土地の保有者であり、17世紀に階層として勢力を伸ばす。田舎に所有する土地に居住する彼らは郷紳 (country gentleman) と呼ばれ、郷士 (squire) として

地域の中心となり住民の面倒を見、生活のために働くことはない。紳士というのは元々、家柄・身分・所有地という外面要素から規定される存在だが、次第に有徳性という内面要素も具えるように期待されていく。その徳目は中世騎士道の伝統に由来する自制、誠意、公正、気取りのなさ、勇気、作法、知性、慈愛等である。紳士階級には、高度な教育を受けた専門職従事者（聖職者、法律家、医師、官吏、作家、教師等）や裕福な商人も加えられ、商売蔑視の風潮はない。18世紀には、紳士は「働くことなしに食べていける者」という定義が通用するようになり、働くこと、特に商業にかかわって儲けることは卑しいことであり、紳士たることと両立しないとされるようになる。紳士像は時代が下るにつれ、重点が外面要素から内面要素に移されていく。その頂点がヴィクトリア朝（1837-1901）である。）

「第一部 第一章 II. オースティンが描いたジェントリ」

先生の分析は、「序」と「I. 紳士の概念」で説明された紳士概念を踏まえて、ここ「II.」で、オースティンの小説『高慢と偏見』（1813）と『エマ』（1815）の主な作中人物の人柄、行動、心理の動きに向けられる。その結果、レーディ・キャサリンは上流階級に属しているが、道徳的には劣った人間として描かれ、他方、中流階級の自作農マーティンは有徳な人物として、また商人ガーディナーも当時の商人観からすると卑しまれる存在にもかかわらず有徳で理想的な人物に描かれている、との指摘がなされる。また同じ紳士階級でありながら身分に大差のある大土地所有者ダーシーと小土地所有者の娘エリザベスについては、ダーシーの親戚の反対にもかかわらず二人が結婚に至るのは双方が相手の美徳を発見し、それに惹かれたためだ、との分析が行われている。こういう考察から、作者オースティンの紳士概念は家柄・身分・所有地という外面よりも、徳性という内面に重点がある、との結論に至っている。

以上は評者が本論考の要点をまとめたものであるが、論考そのものを読めば、「序」と「I. 紳士の概念」で示された紳士像とその時代的変遷が見事にオースティンの小説で具現化されていることは明らかであろう。また先生の研究方法、すなわち専門知識だけでなく、歴史的社会的背景についての幅広く的確な知識に基づいた上での作中人物分析による研究方法（評者のいう「四本柱」）が説得力ある論理展開を生み出していることも、明らかであろう。

「第一部 第四章 ディケンズにおける紳士像——*Great Expectations* の場合——」

ディケンズの小説『大いなる遺産』（1860-61）では、作中人物のほとんどすべてが上・中流階級に属するオースティンの小説と異なって、上流階級の人間や「紳士」も登場するにせよ、主な役割を演じているのは下層階級の人間である。

先生の分析は、下層民であった主人公兼語り手ピップの行動や心理の動きから、ピップが当初抱いていた紳士像を明らかにし、次いでその紳士像が変化する要因が何かに向けられる。この考察を評者なりに要約すると次のようになる：

〈ピップは少年時代に上流階級の美少女エステラから「下賤」の身を侮辱され、「上流の階級」へ昇ろうとする。そのようなとき、未知の人物から遺産相続人に指定され、上京、世間体を保てる最小限のマナーと教養を身につけ、紳士となる。やがて遺産贈与主が犯罪人マグウィッチだと知ったとき彼は遺産相続を拒否しようとする。紳士たる自分が最下層の人間から遺産を受けるのは世間体が悪いと思うからだ。このときの彼が考える紳士像は、世間体がよく、外見が立派に見える人間であった。ところが、流刑地にいたマグウィッチが密かに帰国、ピップの前にあらわれ、身の上を語る。これを聞いたピップは、汚らしい身なりで最低の人間だと軽蔑していたマグウィッチの「内面」にある「勤勉、やさしさ、勇気、いさぎよさ、感謝の心、誠実」を「推察」し、マグウィッチの中に「新たな紳士像」を発見する（先生は「マグウィッチを紳士に見たてるような大胆な仮説は、今までの解説等では見あたらない」（本書 p.116）と付記されている）。この時、ピップの紳士観は以前の世間体や外見重視のものから内面重視のものへと変わり、ピップは遺産を受けようと考え直す。〉

だが、小説はこれで終わらない。マグウィッチは逮捕、死刑宣告、財産没収となり、ピップは遺産相続の見込みを失う。

このどんでん返しの筋書きについて先生は、「体面を重んじるヴィクトリア朝的紳士像がいかに空中楼阁的な虚像に過ぎないか」（本書 p.139）を描き出そうとするディケンズの意図があったため、とされる。ここで本論考の冒頭部を読み返すと、そのことはすでにそこで軽く触れられている。すなわち、小説の題 *Great Expectations* の“expectations”の意味は「遺産相続の“見込み”」であり、「見込み」は期待外れのこともあるということだ。ピップの紳士像が外面重視から内面重視へと変化しても時すでに遅し、ピップはここでしっぺ返しを受けることになる。

ところが、小説はまだ終わらない。ピップはある商會に就職し、やがて役員になり、「体面を保てる立派な紳士」となる。さらに最終部では、久しぶりに故郷の田

舎に戻ったピップは偶然エステラに再会し、かすかながら二人の結婚の可能性を暗示する展開で終わる。

こういう結末にした作者ディケンズについて、先生は「読者の期待にこたえるためのヴィクトリア朝の妥協のなせるわざであった」（本書 p.142）とされる。ヴィクトリア朝の迎合的商業主義に妥協したディケンズは、本人は気づいていないだろうが、自らの「紳士像」に限界を見せていた、ということであろうか。

この点で注目したいのは、「第一部 第一章 II. オースティンが描いたジェントリ」の冒頭でオースティンの家柄について「彼女の祖父は医者であり、父親はオックスフォード大学に学んで牧師になった、つまり専門職持ちとしてジェントリに属していた」との説明がなされている一方で、父親が下級にせよ官吏であったのに、金銭的には恵まれず、少年・青年時代を苦労の中で過ごし、庶民派作家の地位を掴み、「紳士」の衣を何とかまとうことができたディケンズの出自についての言及がこの論考中どこにも見当たらないことである。

もしかしたらそれは、そのようなディケンズに寄せる先生の「キリスト教的慈悲の心」では、と評者は勝手な思いをしているのだが、先生は私には手の届かない世界で微笑しておられるのだろうか、それとも苦笑しておられるのだろうか。

（注）〈 〉のマークは異先生の論考そのままの引用ではなく、評者がそれを要約したことをあらわす。

ここからは紙面を少し頂戴し、個人的な思い出を書かせていただく。

先生と初めてお会いしたのは、昭和 47（1972）年 4 月のこと。上智大学大学院文学研究科英米文学専攻修士課程に入学し、先生のご講義「19 世紀イギリス社会小説特論」を受講したときだった。ギヤスケル、ディケンズ、ジョージ・エリオットの小説を相当量読んだ記憶が残っている。2 年目には先生のギヤスケル小説に集中した特論があり、これがギヤスケルの小説世界へと誘われる契機となった。

その後は伴侶の海外勤務に従って日本を離れたりと、ギヤスケル研究にも空白ができたが、それが埋められたのが海外から帰国後の平成 4（1992）年、日本ギヤスケル協会の例会で先生にお会いした時だった。20 年ぶりの再会だったが、一学生に過ぎなかった私を覚えておいてくださっていた。

先生のこの遺稿集のカバーの折り返しに先生の遺影が載せられている。端正なお顔立ちは正面に向けられ、左胸には、平成 15（2003 年）に受章された瑞宝小受章をはいよう佩用されておられる。メガネの奥の目は、「万寿子君、英文学研究はまだ続けて

いるかね」と問いかけておられるようである。

最後に、この遺稿集をまとめられたご子息の巽孝之、そのご夫人の小谷真理両氏に深い感謝の念を添えさせていただきたい。

(追記) 『人生の住処』の書名について、編者巽孝之氏のご説明によると、巽先生の単著の人生シリーズ『人生の意味』『人生の風景』に連なる三部作完結編としての意味が込められている、とのことである。

(元ノートルダム清心女子大学教授)